

などありません。先生が前もって、トラックをチャーターしてあって、それにザックと荷物と我々を乗せて飯豊の登り口まで運んでくれました。それから飯豊山荘めがけて登り出したのですが、夜行電車で来たせいか、ヨレヨレになって歩き、山小屋に着いた思い出があります。次の日から山の稜線に出ました。天気も良く、すばらしい景色でした。山の上では水はありません。でも雪渓が所々にあったので、水にはあまり苦労しませんでした。そこにテントを張り、快適でした。



上段左から 岸 菅野君 丸山君 (故) 山中君
佐野君 (故) 大成君 下段 阿部君 (故) 坂井君

それから何日か山行を続けて、下山してきて駅で合宿を解散しました。確か越後下関駅だったと思います。そこでどういう訳か夏休みだし家に帰っても仕様がないうって、我々同期5人で日本海が近いので海に行くことにしました。海に近い駅で降り海岸の砂浜にテントを張り満喫しました。我々だけしかなくて貸切状態でした。パンツ一丁で海に入り、ウニなど取って食べました。他に食糧がないので、近くのお店のおばちゃんに食べ物をもらったりして、みんなで食べました。海に5人でいた事は夏山合宿と違って開放感があり、とても楽しいひと時でした。今でも思い出します。でも5人の内3人は今はいません。若き日の遠い良き思い出です。

昭和41年卒 岸 房孝

山男の夫と歩んで

高梨 洋子

「昭和35年7月28日～8月4日飯豊連峰主稜縦走、責任者私・奥貫氏、OB2名(氏名)、参加者(生徒全員の氏名)、見送りの方々(氏名列記)、装備品、日程(分刻みで記入)、毎日の食事の献立、天候の変化、食事では例えば『昼食・ラスク・バター・ジュース』とあり、さらに『ラスクは昼食としては不適當である。野菜(品名記入)を準備すべきこと』」など。(括弧内は筆者記)

これは夫が遺した克明な山行記録の抜粋です。全ての山行がこの調子で手帳にぎっしりと記録されています。夫がどれだけ多くの同僚の方々とワンゲルOBの皆様の援けをいただきながら、登山を続けることができたのか、若者の命を預かる重みとともに感じさせる、ぼろぼろになった数冊の小さな手帳です。



私の夫、富士三郎は残念ながら20年前に鬼籍に入りましたが、1952年から1991年3月までの

39年間を獨協学園の教員としてお世話になりました。夫の登山歴は本人によれば16才頃に始まり、戦争で中断、戦後は登山よりも学生運動に情熱を注ぎ中断(これは私の推測です)、ようやく獨協で復活したようです。



顧問をお引き受けした当初、私たちは新婚でした。住まいは世田谷区池尻の都営住宅で、そこに顧問の奥貫晴弘先生が打ち合わせに来て下さいました。東京大空襲で焼け出された夫には山の装備は何もなく、全て上野のアメ横で進駐軍の中古の寝袋、ザックなどを揃えました。とにかく臭い、汚い、暗い感じの物ばかりで、好奇心旺盛な愛猫チョコでさえ敬遠する代物でした。足は大事だからと登山靴だけは奮発し、知り合いの靴職人に頼んだ特注品でした。と、まあこんな具合で後ろ髪を引かれる思い(か、どうかは?)で新婚の妻を残しつつ、山行が始まりました。出発の2～3日前頃からお互いの無口が

はじまり、猫さえ寄り付かない雰囲気。全員が無事故で生還できることを祈るような気持ちで、毎回夫を送り出したものです。

一方で楽しみもありました。おみやげ「話」です。差し障りがあるので詳しくご披露できないのが残念ですが、笑える失敗談、ぞっとするような遭難寸前の話など、饒舌が復活した夫にせがんで夜が更けるまで話を聞き、語り合ったものでした。

そんな山男の夫が逝った翌年の秋頃、小諸でのOB会の集まりにお誘いいただきました。以来、息子家族共々お言葉に甘えて参加させていただいております。夫の思い出が詰まった小諸、本当に楽しいOB会です。

末筆になりましたが、「獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会30周年」、心よりお祝い申し上げます。貴会の益々のご発展と登山の無事故、会員皆様のご健勝を祈念して、拙い筆を置かせていただきます。ありがとうございました。

D.W.V.元顧問 故高梨富士三郎氏夫人 高梨洋子

※洋子夫人は平成30年4月7日、85歳で急逝されました。ご冥福をお祈り申し上げます。



獨協学園ワンゲル部

碓井達夫

<ワンゲル部に入部して>

獨協高校のワンゲル部は、夏山だけでなく冬山も行い高校生で冬の戸隠・高妻山を攻略したすばらしい記録を持っていることを中学時代から知っていました。昭和43年4月に獨協学園の入学式当日に部室を訪れ、入部を申し出た思い出は今でも鮮明に記憶しています。1年生は6名ほどが入部し、多くの山仲間ができたことの喜びとこれからどんな山に行けるのか期待が高まりました。

山に登るには、体力をつけることが一番です。部活の練習は以下のようなものであったと記憶しています。まずは持久力を付けるため長距離の走り込み。これは、学校から池袋を回り千登世橋から学校に戻ってくるコースです。坂道のダッシュは、グラウンド脇の坂を使いました。ほんとうに随分と走りました。校舎の階段を使ったものでは、交代で「おんぶ」しながらの昇り降りもかなりきつい練習でした。また、校舎の1階から4階までのダッシュ。実はほとんど競争のようなもので、最上階では、ラジウスが置かれていて1階からダッシュで上まで登り、ラジウスが勢い良く点火した者が一番になる、という酷なものでした。最上階では、3年生が目を光らせて待っています。このような練習の成果もあって、徐々に体力も増してきたのは事実です。

また、合宿となると団体装備や個人装備を含め、たくさんの荷物を運び上げなければなりません。ここで問題となるのは、キスリングに如何にパッキングするかによって、体力の消耗を防ぎ長い時間をかけて歩くことが出来るかの分かれ目になります。パッキングでは先輩諸氏から詰め方を教えていただき、どうにか形の良い担ぎやすいザックに仕上がりました。後は山に行く回数と共にパッキングの技術も上達していきました。

山に入れば歩き方、休憩の取り方や水の飲み方など、下界と違うことも多く学ばせてもらいました。

<思い出深い初めての冬山>

部活の合宿で印象に残っているのは1年生の冬の浅間山です。

昭和43年の冬山合宿は、当初の計画（登山計画書1968年 浅間山：HP参照）では、2年部員2名、1年部員6名



の参加となっていました。合宿日が近づくにしたがって、一人減り、二人減り、だんだん参加者が少なくなっていました。当時から高校生の冬山登山での危険性については指摘されていました。多くの理由は冬山において高校生の体力・技術力・判断力では緊急時に安全を確保するのが難しいとの理由から、原則として禁止されていました。部員の親御さんたちにも少なからず、冬山は危険との意識があったのではないかと推測しています。

その結果、この合宿に参加したのは、1年部員3名（中村 周司、飛沢 祐一、碓井 達夫）と高梨先生と飯島先生の合計5名の冬山合宿でした。

当初の計画では、湯の平にベースキャンプを設置し浅間山に登る予定でしたが、参加人数が少ないことから急遽、浅間山荘周辺のバンガローをベースに計画を変更しました。団体装備を全て持って行ったのか、定かではありませんが、当時、ワングル部のザックと云えば特大の72cmのキスリングが主流で、その荷物は半端なく自分の頭より高いザックになり、一人で担ぐことができなく、部員に手伝ってもらいやっと担げるような重さでした。もちろん、歩くのもやっとの状態で、駅の階段の昇り降りで息が切れるほどでした。バンガローに変更したことにより、湯の平まで荷揚げをしなくてすんだことはラッキーでした。

さて、バンガローをベースキャンプにして、いよいよ冬山の体験の始まりです。登頂の日、冬山装備に身を固めっぱしのアルピニストになったような気分になりました。先生からアイゼンを履いての歩行の仕方や、ピッケルの操作などを教えてもらいながら順調に高度を上げて行きます。二ノ鳥居を過ぎると徐々に傾斜が増し、右手に牙山の荒々しい岩壁を望み湯の平に入ります。賽の河原から森林限界を抜け、前掛山の荒涼とした斜面を風の洗礼を受けながら登って行くと山頂に着きました。山頂からの景色の記憶はなく、火口が真下に見えたのと風が強かった記憶しかありません。

テント泊ではなかったのですが、バンガローの中もかなり冷え込みシュラフに入る前に、高梨先生が「気付け薬だ。」と称し、ウイスキーの小瓶を取り出し、キャップに注ぎ一杯ずつ内緒で飲ませてくれた事が今でも懐かしく思い出されます。

あれから、半世紀もの年月が経ちますが、高校生活の3年間はワングル部によって多く山に登り、多くのことを学んだ貴重な青春時代でした。

これからも、獨協学園ワンダーフォーゲル部とOB会が、益々発展されることを祈念いたします。

46年卒 碓井達夫

創部50周年記念現役OB合同登山

金 有一

年配の同窓生には「馬城」「目城」「めじろ」という名で親しまれた懐かしい年刊誌をご記憶の方も多いことと思います。ふとしたことから、図書館の学園資料室に大切に保存されている「めじろ72号」(1955年発行・発行人村松定孝)を手にする機会がありました。何気なく頁をめくっていると「ワンダーフォーゲル」と題された森本悌次、打矢之威(昭31卒)両氏が寄稿された一文に目がとまりました。



「今年から獨協にワンダーフォーゲル部が創立さ

れましたが・・・」で始まる文章には、ドイツで誕生したワンダーフォーゲルという国民的自然生活運動を天野貞祐先生のお話と重ね合わせ、「正直、勤勉、清潔、規則正しく」という四つのことを実行することに他ならないと記されており、併せて創部時の諸先輩の方々の自然に対する熱意も語られてい



ました。数えてみるとワンダーフォーゲル部が創られてかれこれ 50 年になることも分かりました。偶然にも、私が現在クラブ顧問としてかかわっているワンダーフォーゲル部創部当時の状況を知り、先達



の方々の苦勞と熱き思い を垣間見て少なからず感動を覚えました。クラブ活動はその時代を反映し、栄枯盛衰を繰り返し受け継がれていますが、どのような経緯を経て今日に至っているか、現役部員には明らかでない場合が多いようです。そこで、創部 50 年を記念して、OB と現役の交流を 合同登山を通して実現させたいとの考えが抑えがたくなり、OB 会に打診したところ、多くの OB の方々から賛同を得、実現の運びとなりました。登る山も記念 登山に相応しい北海道の大雪山・旭岳と決まりました。遠隔地でもあり合宿地の制限や現役部員の負担など解決しなけ

ればならない問題もありましたが、幸いにも OB 会から団体装備と遠征費用にと、多額のご寄付をいただき難問も解決し、先輩方の激励もあり準備も整いました。

全コースを OB と現役が一緒に歩くことには制約もあり、第一日目の旭岳だけの合同登山となりました。参加メンバーは、創部当時を熟知し、還暦を過ぎた今でも元気に山登りを続けられている若井永(昭 32 卒)、井上正巳(昭 32 卒)夫妻、千野一郎(昭 33 卒)、常盤雪夫(昭 35 卒)と、若い世代の OB からは大橋友徳(平 10 卒)、半田諭志(平 12 卒)、石鍋健太(平 13 卒)が参加し、現役部員である中高生 10 人及び顧問 2 人の大所帯となりました。盛んに白い噴煙を上げる爆裂火口の地獄谷を左に見ながら、火山礫のガラガラしたきつい登りに果敢に挑み頂上をめざしました。北海道の最高峰からの眺めは正に雄大で、一同、征服感に浸りながら OB と現役の心が一つになったのを感じたひと時でした。

現役の諸君らは、これから 50 年、同行の先輩方と同じ年齢になる頃、ワンダーフォーゲル部は創部 100 年を迎えることも感じていたようでした。

「獨協通信」第 61 号(平成 15 年 12 月 10 日発行)ひろばより転載

D.W.V.元顧問 金 有一

皆様の健康をお祈りします

渡辺知也

冬の西穂高岳で獨協生ほか四人が凍死しました。夏のテントを使用したとの新聞の報道です。その翌年天野貞祐先生の提唱でワンゲルが創設されました。小生は中学三年生でしたが、早速入部して夏合宿の北アルプスに参加しました。



な別荘がチューリヒ近郊にありそこを基点にして再び山行を始めました。

その後かみさんを取り替えて都合三回結婚しています。現在のかみさんはハンブルグ出身で新聞記者をしています。母親はスイス・ティチーノ州のアスコーナにいて、そこを起点にして再び山行をするようになりました。スイスには何千何

森本、打矢、赤石先輩等と日本史の皆川先生が指導しました。爾来山に取り憑りつかれた小生は修学旅行を欠席し、その時間を全部山行に充てました。早稲田大学露西亜文学科に入学して以来プッと山に行かず勉学に専念、トーマンという商社に入社、その翌年にチェコスロバキアに留学、それからウィーンに移動して以来ヨーロッパでの生活が二十数年続きました。その後しばらくしてドイツ人のガールフレンドの両親の広大



万という山行ルートがあるので無限の可能性がります。感心したのは朝早く登り始めて夕方に下山するまでタバコの吸い殻、キャンディーの紙等落ちていないことです。山小屋は無人の処でも皿やタオルがキチンと整理されています。世界一の生活水準の高い国なのでその身倍の程が解ります。その後ロカルノの近くの山村に三百年以上経た家を買ひ求めました。凡て近代的に創り直し実に快適に暮しています。

そこに夏になると日本から金子、打矢、若井、千野の先輩たちが再三訪れ、よく一緒に山行しました。今にして思えば夢のような話しです。現在は小生も七十六歳になりましたので日本から年金で暮らしています。カミさんは小生よりも二十才も若いので現役ですので、カミさんに喰べさせてもらっています。従って老後の心配はありません。

彼女は特派員としてロカルノで働いています。小生があと十年、つまり八十六才まで生きると日本四十年、西欧四十年の暮しになります。小生の死後は簡単に始末してもらいます。焼場で遺骨をポリバケツに入れ(骨つぼは高価です)ヘリコプターに頼んでピッオヴォゴルノ(海拔二千五百メートル)に運んでもらいます。この山は自宅の眼前に聳え、実に姿の美しい山です。小生は一度は息子と、二度目は金子、千野先輩と登頂を試みましたが、成功していません。三度目は遺骨となって登山します。そこで散骨してもらいます。もっともヘリの代金が高いのでその代わりに裏の小川に流すことになるかも知れません。この家族の判断に小生は口出しできません。

小生は毎朝坐禅をしますが、その際に必ず両親に念ずることがあります。小生をこうして健康に生んでくれてありがとうと云います。この感謝の気持ちが大切です。皆さんも今からでも遅くはありません。御両親が健在ならばせいぜい親孝行のまねごとをするなり、もし逝去されているなら仏前に手を合わせるなり、仏壇もないならば心の中で挨拶して下さい。なにしろ小生は親不孝の最高峰を登りましたので。皆様の健康をお祈りします。

昭和 34 年卒 渡辺知也

ワングル顧問の頃の思い出

金 有一

長い教員生活の中で定年になるまでの最後の十数年間、新村三千夫先生とワングル部顧問として子供達に同行し 20 座に及ぶ百名山へのアタック、里山歩きの楽しさや苦しさを共有してきた。若い彼らは登るのが速い。日帰りの奥多摩などの引率は結構しんどい思いをしたが、宿泊を伴う山行の方が私にとっては楽であった。理由の一つ、背負う荷が彼らより軽いからである。日帰り山行ではザックの重さはほぼ同じだが、夏合宿などでは子供達はテントや食料など多分 30 kg 以上を背負っていた筈である。顧問の私は身の回りの品だけで随分と軽くなる。その差で歩く(登る)早さは同じになるのである。こうして定年になるまで子供達と一緒に朝日、吾妻、大雪、南ア、北アの奥まで足を踏み入れることができたのも新村先生や同行した OB 諸君、子供達の協力があってこそと感謝している。合宿当時、登山道や山小屋で出会った人たちの思い出を幾つか記してみたい。「白馬岳・朝日岳」合宿(1999 年 7 月、3 泊 4 日、猿倉～大雪溪～白馬



左から OB の木村君 新村先生 関井君 筆者

岳～雪倉岳～朝日岳～五輪尾根～蓮華温泉～平岩)：白馬尻で早めの昼食を済ませ、行動を開始したのは 12 時少し前、縦走用の重い荷物を背負い斜度のきつい大雪溪に難儀していた。突然の夕立ちで近くの岩場の陰で雨宿りを余儀なくされ、小降りになるのを待つて 6 時までにはテント場につかなければならないと雨の中を再び歩き始めた。小雪溪手前で避難小屋を見つけまた小休止、中を覗くと暗いため人相は判らず、ただ一人軽装の男がいるというのが第一印象だった。突然、「先生！」と、驚くばかりだった。ここに教え子の関井君がいるとは予想だにできなかった。聞くと、山頂の昭和大学医学部診療所のスタッフの一員として奉仕活動し、今日の仕事は最後の登山客を見届けてから頂上の宿舎に戻るとのこと。彼に励まされテント場に着いたのは夕方 6 時を回って

いた。翌朝、彼に別れを告げて朝日岳を目指す。鉢岳を巻き強風を避けて雪倉岳避難小屋での昼食は単独行の女性と一緒に、言葉を交わすうちに彼女の壮大な計画を聞き、我が耳を疑った。日本海の親不知から北アルプス・八ヶ岳・南アルプスを縦走し静岡県の大浜まで歩くとのこと、無事と完全踏破を祈らずにはいられなかった。時折り記憶が蘇り計画は完遂できたのだろうか気になっていた頃、年が明けて雑誌「山と溪谷」3月号に完全踏破達成の手記が目にとまり、彼女であることが直ぐに分かった。手記には住所の記載もありお祝いの手紙を書いた。彼女からの返信には『先日はお便りありがとうございます。風の強い7/23の雪倉岳避難小屋でのこと、よく覚えています。あの時頂いたスイカは本当においしかったです。・・・日記に毎日の食事のメニューも書いていたのですが、7/23のお昼のメニューには「スイカ（高校のワングル部に頂いた）」と書いてあります。・・・』とあった。この合宿は歩く距離が長く毎日10時間以上のアルバイトを強いられた。「雲ノ平」合宿（2004年7月、4泊5日、折立～太郎兵衛平テント場～薬師岳～太郎平小屋～薬師沢小屋～雲の平キャンプ場～祖父岳～岩苔乗越～水晶岳～野口五郎小屋～真砂岳～湯俣岳～湯俣温泉～高瀬ダム）：毎日が歩く距離の長い山行だった。薬師峠のテント場を早朝に出発し薬師岳をピストンして太郎平小屋で小休止後、北アルプスの秘境と呼ばれる黒部川本流との出会いに建つ薬師沢小屋までジグザグ道を下り、さらに雲ノ平の溶岩台地へ登り返す強行軍だった。水晶岳のピストンを終え東沢乗越のあたりから風も強くなり雨模様、午後3時を回っていたらどうか、ずぶぬれになりながら野口五郎岳のテント場に着くとそこは閉鎖、幕営できないとのこと。止む無く野口五郎小屋で素泊まりとなる。献立はカレーライス。幸いに登山客もなく、小屋の方々のご理解を得て自炊が始まる。お手伝いに来ていた小屋のご主人の高校生のお嬢さんと子供



左端 筆者 前列中央 新村先生 後列右端 獣医さん

達は意気投合、高校生同士楽しそうに和気藹々とカレーを作っている。完成したカレーを口にしたら小屋のご主人は、小屋のカレーよりも美味しいと褒めてくれた。この夜は心温まる小屋の方々との交流の場となったことは云うまでもない。「荒川岳・赤石岳」合宿（2005年7月、4泊5日、樺島～千枚岳～荒川岳東岳～赤石岳～樺島）：山行の途中から赤石岳で百名山完登を目指す富良野の獣医さん（テレビ番組・倉本聡「北の国から」で獣医役としても出演）と出会い99座目の荒川岳東岳、100座目の赤石岳に同行、子供達が立会い人となり百名山完登のお祝いをしたことは感慨深い経験だった。赤石避難小屋では獣医さんからお世話になったお礼にと子供達にジュースの差し入れもあった。この夜の登山者は獣医さんと我々だけ、小屋番氏が食後に面白い場所に案内するからシュラフをもって来るようにと云う。小屋から山頂近くまで行くと小屋番氏はシートを拡げシュラフにくるまって仰向けに寝るようにと指示。漆黒の闇の中に都会では決して見ることが出来ない満天の星空、目が慣れてくると一つ二つと流れ星が多方向から流れる、人工衛星の赤い糸のような航跡に歓声が上がる。小屋番氏の解説を聞きながら獣医さんと一緒に壮大な宇宙の神秘さに想いを馳せたひと時だった。秋になって獣医さんから学校宛てに段ボール箱いっぱいの富良野産新ジャガイモが子供達に送られてきて、部室で分けたことも懐かしい思い出である。「三頭山」送別山行（2007年2月、日帰り）：私が定年を迎えた年の2月、送別山行・三頭山を企画してくれた。武蔵五日市駅に着くと駅前に、ハリウッドの映画スターが乗るような『大きな黒塗りのリムジン』が出迎えているのではないかと。何人が乗れるだろうか、対面のシート、車内の調度品に目を見張る。都民の森の駐車場に横付けすると大勢の登山者の視線がリムジンに向けられて、下りる時は少し気恥かしかったが、新村先生と子供達の心遣いが嬉しかった。新村先生、山行を共にして今はOBとなった諸君、ご一緒させていただいた数々の山行、原稿を書きながら懐かしく思い出しております。お世話になりました。

D.W.V.元顧問 金 有一

D.W.V.OB会の思い出

富樫 克己

高校生時代、「道徳」の教科書に1953年にエベレスト初登頂したE.ヒラリー（&テンジン）の手記がありました（時は1966年頃ですから結構、情報としては早い）。M.エルゾーグのアンナプルナ登頂。また最近、1924年にエベレスト初登頂したかも知れないG.マロリー（Because it's there

ーそこにエベレストがあるから..)の遺体が75年後の1999年に発見されたTV番組もありました。つまり、トレンドはヨーロッパから来ていました。

私の登山はあまり経験的ではない？友人に誘われるまま入部した私の登山の地に足が付いていないのは戦後日本の感覚に似ている？そんな感じでワンゲルに在籍していた？



たまに思い出した様に登山していた私に昔のワンゲルOB会からの参加案内が来ました。当時は皆、若く、OB会は発足したばかり。年齢的にも余裕の出たスタッフの集まりで結構、盛り上がっていました。現役時代も流される様だった私にはOBの方々との登山は俄然、リアルなものになりました。何か地に足が付いている人達？戦中派の自信と経験は得難い..高度成長期を支えていた先輩？知らない山に知らないまま参加し、何かあっても大丈夫..って感じでした。同級生との登山も復活し、彦坂くん、長瀬くん、知らなかった後輩との交流も始まりました。

当時の有志OB会山行を率いていたのは昭和35年卒の佐藤OBと常盤OBでした。佐藤奥様のイラストと共に月例山行のパンフが届きました。海外駐在の後、日本の友人関係も途切れ、手持無沙汰だった私は昔の登山を復活させた？まあ、年齢的にもトレンド的にも改めて中高年の登山は当時の先端だった？..のは如何にも獨協的？当時、佐藤先輩の住居が東武沿線だったせいか？山行は南会津が多く会津駒ヶ岳、そして七ヶ岳は素晴らしかった。水が流れる谷道を遡っていくって感じが新鮮で、ガスってた頂上付近の霊験さとの対比が渋く、日本的な山の雰囲気。ここら辺が西洋的なアルピニズムとは差異してる中国由来の山岳仏教的なアニミズムがなお、我々に残っているのでは？ー遺伝子に残されている記憶、夢に現れてくる祖先の記憶が既視、デジャヴュしてるーかも知れません。3000m級の岩っぽい山（ALP=岩の山の意）はヨーロッパ的な近代登山、アジア的な緑っぽい山との象徴の違いでヒトが生きられないデス・ゾーンはアジア人には意味が無かったのでは？今ではむしろ、先輩達が近代モダン登山に近かった？..と思える時代になりました。



そんなこんなもあり10年ほどOBの方々と山行を繰返し、お陰で私の登山歴も個人的山行もあり現役時代より充実した内容になりました。OB会が無ければ私には山は遠かった..継続こそ力なり！思うに人それぞれ、人生のタイミングで突然、登り始めるヒトもいれば過去の実績を自負し止めてしまうヒトもいるでしょう。ヒトそれぞれ、人生いろいろ。現役時代、山は私には厳しかったけどOB会の山は優しかった。大人になって山を楽しむチャンスを与えてくれたOB会に感謝..。

昭和43年卒業 富樫 克己

☆活動記録から 2013年 秋の大親睦会 長野県小諸 獨協学園「日新寮」



例年より一週間遅くの開催となった親睦会は、夕暮れともなると皆長袖に着替えるほどの高原の秋を感じる中で始まりました。残念ながら、八ヶ岳の山容は眺めることは出来ませんでした。女性陣が散策時に採集した秋の草花がテーブルを飾り、洗君の手作りによる「ほのぼのランプ」が灯る中、前庭でのバーベキュー料理を楽しみました。また、翌朝には近くで取った多種類のキノコの中から、鳩首会議で食に適するものを選び味噌汁の具としてい

いただきました。キノコはいつもいい仕事をしています。

(参加者 飯嶋義信 金 有一 打矢之威 井上正巳・順子、門倉捷郎、佐藤八郎、常盤雪夫、二村謙次・静子、矢崎宣彰・房江 橋本清子 有我昭蔵・鏡子 鈴木義三郎 高梨 哲・靖恵・洸)

☆活動記録から 2010 年 福島県七が岳 駒止湿原散策 南会津町針村



民宿 清水荘にて

例年ならパステルカラーのグラデーションの見事さを堪能できる山々も、今年はモノトーン。里ではやっと桜が三分咲きのあり様。豪雪で知られる南会津の春本番はもう少し先のようです。山開き前の登山道に踏み跡は無く、ルート探索に苦労します。雪を「踏み抜き」膝まで埋まること多数回。

「黒森沢」本流の徒渉地点のスノーブリッジ越えを断念して引き返しました。GPSの記録による最終到達地点は、「護摩滝」まで100mほどの手前でした。

一方、駒止湿原は入口で通行止め。散策組は遠く会津若松-土湯-福島と6時間におよぶドライブを満喫したようです。

古民家であったという「清水荘」では大黒柱と太い梁を仰ぎ見ながらの大宴会。赤々と燃える炭火で焼く「しんごろう」と「そば」は評判どおりの美味でした。

(参加者 井上正巳(順子) 千野一郎(光子) 佐藤八郎 常盤雪夫 中野 茂 橋本正樹(清子) 石谷洋子 佐々木久子)

☆活動記録から 2016 年 第31回OB会総会 小石川後楽園「涵徳亭」



7月17日の12時半から小石川後楽園「涵徳亭」でOB会の総会が開催されました。出席者は会長中野 茂以下、飯嶋義信、打矢之威、井上正巳夫妻、若井 永、千野一郎夫人、佐藤八郎夫妻、富樫克己、長瀬 治、木村泰樹、二村謙次、手島達雄、生田 哲、坂井 司の16名(敬称略)でした。

今総会では長年会長として奮闘された中野氏が退き、新会長に富樫氏が選出されました。中野氏について諸先輩が多い中よりリードして会をまとめていただきました。引き続き事務局としてよろしくお願いします。次に秋の親睦会の日程を協議し決定しました。懇談では会員各位の近況をはじめ、ワンゲル部草創期のエピソードなども披露

され、貴重な話を聞くことが出来ました。二次会にも12名が参加し楽しい時を過ごしました。

追 悼

